

## 個性って？

### 1. 教育を考える一言

「教師が樂できるような手のかからない人間を作ることが学校教育とでも思っているの。」

### 2. 背景

山田洋次監督による、高等養護学校を舞台に子ども達・教師の葛藤を描いた映画『学校Ⅱ』の中のセリフです。お母さんと離れて不安になり、全く言うことを聞かない重度の障害を持つ生徒・祐矢。祐矢は、紙をばらばらに切り裂いて上に放り投げる瞬間は、集中している顔を見せます。新任のコバ先生はそれを「迷惑なだけです」と切り捨てる。しかし、ベテラン教師の竜先生は上の言葉をなげかけ、諭します。

### 3. 考察

大学では、子どもの個性を大切にすることや、子ども一人ひとりのニーズに対応して教育することが必要であると教えられることが常です。新任の先生も、おそらくそのような理想を持って、教壇に立つのだと思います。私も何度か教育実習を経験しました。子どもの個性を發揮するのを助けるような授業がしたい、と思いながら実習に行ったことを思い出します。

この言葉を聞いたとき、私が子ども達の個性を發揮すると言いながらも、それができてなかったのではないかと、反省しました。この場面の「紙を散らかす」という行為は、コバ先生からすると、ただの問題行動でしかありません。しかし、竜先生からすると「紙を散らかす」という行為は、裕也にとって個性的な自己表現であり、教師が子どもとの興味を引き出すきっかけとなります。この解釈の違いは、これからの指導につながるだけでなく、その児童生徒の捉え方を変えてしまいます。特に、この場合のように、障害を持つ子の場合、その子一生に関わることになるかもしれないのです。

日本の障害を持つ子どもの教育・福祉を切り開いた内の一人である糸賀一雄は、次のように述べています。「この子らはどんなに重い障害をもっている、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間としてうまれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。」

個性とは何でしょうか。私は大人から見ていい面だけが個性として強調されているように思えます。個性を育む教育では、大人に見せてはいけない個性はどう扱われるのでしょうか。個性を社会的に称賛される資質や周りの人と違いとして捉えるのではなく、この人個人のなかの、ありのままの特徴として捉えるべきではないかと思えます。

#### 引用・参考文献

山田洋次・朝間義隆『学校Ⅱ』ちくま文庫、1996年、pp.80-82

糸賀一雄『福祉の思想』NHKブックス、1986年、p.177

DVD『学校Ⅱ』山田洋次監督、松竹ホームビデオ、2005年